

体育授業におけるスポーツオノマトペの適切な使い方について

— “できた”を体感できる授業を目指して —

学籍番号 (249344)

氏 名 (中本大地)

主指導教員 (小川剛司)

副指導教員 (神藤隆志)

1. 背景

近年、運動嫌いや体育嫌いを訴える生徒の増加が深刻化しており、体育授業では技能水準の差が授業参加度の差につながり、運動が苦手な生徒ほど回避的態度を形成しやすいことが指摘されている（佐々木ら，2016；當山，2024）。その背景には指導言語の在り方も関係し、「体幹を安定させる」などの抽象的表現は運動経験の乏しい生徒にとって動作イメージを形成しにくい（佐藤，2003）。また、自己の有能感や楽しさは学習の継続や粘り強さを規定する要因である（Guanら，2023）。

スポーツ場面で運動技能や動作感覚を表現するオノマトペ（スポーツオノマトペ）は、動作のコツや感覚的特徴を簡潔かつ直感的に伝達できる表現として注目されている（藤野ら，2006）。実際、オノマトペを含む資料は運動のコツ理解やイメージ形成を促すことが報告され（奥村ら，2006；藪井ら，2023）、初心者から上級者まで一貫して効果があると述べられている（吉川，2013）。一方で、学習者が前提となる動作イメージや身体感覚を十分に備えていない場合、意図した内容が正確に伝達されないことや、指導者と学習者で理解が一致しない課題も指摘されている（藤野ら，2006；山中，2018）。しかし、学校体育の実際の授業において、生徒の技能段階や学習状況を踏まえ、どのような場面でどのようなオノマトペをどのように用いることが有効かは十分に検討されていない。そこで本研究は、体育授業におけるスポーツオノマトペの使用が生徒の技能変化にどのように関与しているのかを、学習者の技能段階、オノマトペの種類の違い、教材特性の観点から明らかにし、学校現場での個別最適化された指導法の開発につなげることを目的とした。

2. 方法

対象は大阪府内の公立高校で、1年男子1クラス21名、2年女子1クラス24名とした。対象単元は柔道（1年男子12回）、ハードル走（2年女子6回）、バスケットボール（2年女子5回）であった。測定は授業観察によって行い、担当教員にスポーツオノマトペの概念と研究目的を説明したうえで、個別指導場面で積極的にオノマトペを用いた技術指導を依頼した。観察者は授業を継続的に観察し、①オノマトペが使用された生徒の初期技能レベル（10段階）、

②教員が用いたオノマトペおよびその対象となった動き、③使用後の技能変化量（1：悪化または変化なし、2：良化、3：著しく良化）を記録した。初期技能レベルは事前に作成した評価表に基づき点数化し、記録されたオノマトペは先行研究（吉川，2013）に基づいて「パワー・スピード・持続性・リズム・タイミング・フォーム」の6カテゴリに分類した。記録されたデータを元に、オノマトペ種類別出現頻度、技能段階およびオノマトペの種類による技能変化量の平均を算出し、生徒の技能段階やオノマトペの種類による技能変化量の差を検討した。

3. 結果

全種目単元で記録されたオノマトペは146語であり、種類別の出現頻度には有意な偏りが見られた。また、全種目単元において技能段階による技能変化の程度は有意に異なり、技能が高い生徒は技能向上の程度が大きい傾向が見られた。なお、柔道およびハードル走の結果においても同様であった。ハードル走において、オノマトペの種類によっても技能変化の程度は有意に異なり、「リズム」と「フォーム」が、「パワー」よりも技能変化の程度が大きかった。

4. 考察

記録されたオノマトペの種類別の出現頻度は有意に異なり、観察しやすく言語化しやすい運動情報に焦点化されやすいことが示唆された。また、種目によって頻度の偏り方が異なっていたことから、教材特性に応じたスポーツオノマトペの使用頻度が異なっていることが示唆された。全種目単元において、オノマトペを使用した個別指導では高技能段階の生徒と低技能段階の生徒との間で技能変化に差があったことから、オノマトペによる技術指導の技能変化の程度は、生徒の技能段階に依存することが示唆された。また、オノマトペの種類による技能変化は、全種目と柔道において違いが見られなかったが、ハードルの授業においては、「リズム」と「フォーム」に関するオノマトペは「パワー」のオノマトペよりも有意に大きな向上を示し、種目によってオノマトペの使い分けが、生徒の学習効果を上げるうえで重要であることが示唆された。

5. 結論

本研究で記録されたオノマトペは、種類別の出現頻度に明確な偏りが見られ、教材として用いる運動の特性により違いがあることが示された。また、全種目単元で高技能段階の生徒はオノマトペの指導による技能変化が大きく、低技能段階の生徒の技能変化が小さいことから、オノマトペを使用した指導は、受け手側に一定の動作理解や基礎技能が前提として求められる可能性があることが示唆された。また、ハードル走では「リズム」および「フォーム」を表すオノマトペを使った指導が有意に大きな技能変化を示し、指導者が教材特性を理解し、それに合ったオノマトペを使用すること、また補助教材を併用することが生徒の学習効果を上げるうえで重要であることが示唆された。